

機関番号：34316  
 研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2008～2010  
 課題番号：20530787  
 研究課題名(和文) 養護教諭のヘルスプロモーションに対するパフォーマンス・エスノグラフィ的支援研究  
 研究課題名(英文) Performance ethnography for supporting to school nurse-teachers' health promotion  
 研究代表者  
 秋葉 昌樹 (AKIBA YOSHIKI)  
 龍谷大学・文学部・准教授  
 研究者番号：30330020

研究成果の概要(和文): 質的調査法の新しい流れのひとつであるパフォーマンス・エスノグラフィを通して、養護教諭のヘルスプロモーションの実際的問題に支援的に関わる臨床教育社会学的研究のモデルを構築した。その結果、成果発表としてのパフォーマンスは、研究に参加してもらった実践家とともに遂行することで、成果発表もそれ自体として「支援的」に機能しているという知見が明らかになった。

研究成果の概要(英文): I have been constructing a new model for studies on clinical sociology of education, by conducting theatre workshops and performance ethnography which is one of the new streams in qualitative research, to resolve and overcome the problematic situations of school nurse-teachers' everyday health promoting activities.

In consequence, I as researcher and participant practitioners have found that performance as presentation itself work as support system which helps school nurse-teachers to find different ways of overcoming their problematic situations.

#### 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究代表者の専門分野：教育社会学、応用演劇学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：保健室、学校臨床、応用演劇、パフォーマンス・エスノグラフィ、臨床教育社会学

#### 1. 研究開始当初の背景

(1) 児童生徒の生活環境の多様化やそれに伴う心身の健康にかかわる問題に対する危機感を背景に、養護教諭の職務を健康教育および健康管理を主導する役割を担うヘルスプロモーターとして再定義しようとする議論が日本学校保健学会ほか関連諸学会で高

まりつつあった。

(2) しかし、そこでの議論は理念のレベルに留まっており、保健室での児童生徒への対応をはじめとして、生徒指導上の諸問題に日々対応する現場の日常的コンテクストとの間には距離があった。

## 2. 研究の目的

本研究では、上述の(1)と(2)の距離を埋めつつ、養護教諭が現場の関係諸教員との間でどのように問題を乗り越え実践を展開していかを考察する具体的方法としてパフォーマンス・エスノグラフィを試行することで、実践研究の社会科学的なモデルづくりを進めることを目的とした。

## 3. 研究の方法

(1) 質的研究法としての特徴：養護教諭ら実践家に定期的に参加してもらった演劇ワークショップ研究会を通して、エスノグラフィ的交流を進め、問題点を整理していきつつ、それらを脚本化し、パフォーマンス(上演)による成果発表を実施する方法を採用した。

この方法は演劇的手法に基づく質的研究法・調査法として近年開発されたものであり、研究者主体の成果発表を想定した論文を中心にした成果報告の仕方と異なり、実践家との共同研究のゴールとして設定するうえで適した方法であると考えられる。

(2) 実践的研究としての特徴：実践的研究として、従来と異なり本研究では学校現場にフィールドワーカーとして長期参観するのではなく、むしろ研究参加意欲のある実践家を中心に学校現場から離れた会場で組織、運営した。連絡調整等の中心も、研究参加者の実践家自身にあることで、現場サイドの問題を率直に議論することができる態勢を構築した。

## 4. 研究成果

(1) 方法論的革新：研究課題名にもあるとおり、研究の焦点の一つは、成果発表の仕方に置かれていた。その方法としてのパフォーマンス(つまりパフォーマンス・エスノグラフィ)に関しては、研究に参加してもらった実践家とともに成果発表をとり行うことで、成果発表がそれ自体として「支援的」営みとして機能しているということが明らかになったことは、重要な成果のひとつと言えるだろう。

いま述べたそうした研究成果の一端は、下記の5.で記したとおり、社会調査協会の紀要、2冊の共著書に執筆した論稿、さらには実践的取組の経過報告として実践系ジャーナル等に論文・報告として逐次公開してきた。

たとえば雑誌論文 ~ に掲げた四回シリーズの連載は、本研究に先立って研究代表者が実施した実践的研究と本研究との橋渡しをするとともに、本研究の方法論的基礎となる研究会の方法について、研究代表者自身による試行的実践を踏まえつつ、実践家向けに分かりやすく解説する側面を持つものである。

また、雑誌論文 として掲げた社会調査協

会の紀要では、小特集「質的研究の“質”を問い直す」のための論稿のひとつとして寄稿依頼を受け、本研究の採用するパフォーマンス的手法の持つ意義を強調するとともに、パフォーマンス・エスノグラフィが実践現場の今日的課題を当事者の観点から明らかにする上で備えうる意義等を論じた。

また共著書「質的調査法を学ぶ人のために」においては本研究の理論的背景となる論稿および参与観察論に置けるパフォーマンスの意義についてまとめ、「エスノメソロジーを学ぶ人のために」においては学校という現場のやりとりに孕まれる問題を演劇化したパフォーマンスを書き起こしたデータを主要な素材として分析することで、パフォーマンスの研究を記述する方法論的試行を提出した。

さらに、経過報告を続けてきた実践系ジャーナル(雑誌論文 ~ )には、下記に研究成果として掲げた研究代表者自身による報告以外にも、研究代表者との共著によりまとめられたもの、さらには研究に参加してもらった実践家が自分たち自身の取組を実践経過として報告する機会を継続的に持つことができたこと(ほぼ2ヶ月遅れで研究会の取組を公刊してきた)は、従来の質的研究法の成果公開のあり方を革新する可能性を備えている。

(2) 演劇的手法のインパクト：本研究を特微付けるポイントのひとつに、演劇教育活動を進めるNPOより若手演出家・森陽平氏の継続的指導を得たことがあげられる。このことにより、成果発表の機会としてのパフォーマンス・エスノグラフィのレベルの向上が見られた。

パフォーマンス・エスノグラフィが上演された際の観客が、参加的態度でエスノグラフィの完成に貢献し、観客と上演者とのインタラクションが成果発表の機会をリッチな場になったことは、上述したように、成果発表それ自体が「支援的」機会としての意義を確かなものとした。

すなわち、成果発表の場において、研究に継続的に参加し、パフォーマンス・エスノグラフィの上演に演者として参加した実践家が、自らのパフォーマンスについて「見ているが気づかない」側面があったことを観客の参加および両者の相互行為によって気づくことで、振り返りの重層的な機会となったことで、結果的に「支援的」機会となったのである。

(3) 「臨床的サイクル」の達成：結論的に言えば、本研究で確認された成果は、実践家が、自分たち自身の問題を[1]Action(=演じることで) [2]Reflection(=振り返り、相対化し) [3]Transformation(=問題状況を変えていく/乗り越える)という本研究で「臨床的サイク

ル」と呼ぶところのサイクルが、実践家に身体化されつつあったことに表れているといえるが、そのことは実践家自身によりまとめられた上述の報告においても示されるところである。その中で結果的に、本研究の主題にもあるヘルスプロモーションが、理念としての姿が如何に現場の実践とリンクしないかということが示された。

逆に明らかにされたのは、実際の健康推進の取組みが、現場の日常的コンテキストに深く埋め込まれたものであり、その個別具体的コンテキストにおいて不可避に生じる問題の解決とともに日常的に展開していくという点である。そうした点が、本研究のいう「臨床的サイクル」を経るなかで明らかにされたのである。

このことは、質的調査法の主流派における、いわば記述中心主義とでも言える現状に対する問題提起ともなっている。すなわち、質的研究に対する社会的要請の重要な柱でもある研究の臨床性を、如何にして担保すべきかという問題提起でもある。こうした問題提起は、理論的にはこれまでも可能であったと考えられるが、実際の実践的研究活動の成果を踏まえつつ、論じるものは少ないと考えられる意味で、有意義であるものと考えられる。また今後の関連諸政策等を推進するにあたって、それを現場レベルにおろしていく上での方法を考察する際、示唆的なポイントとして有意義であるうと考える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

秋葉昌樹、保健室における《会話》の構造 (連載:第1回) 保健ニュース、査読無、4月8日号、2008、4-5

秋葉昌樹、保健室とカウンセリング (連載:第2回) 保健ニュース、査読無、5月8日号、2008、4-5

秋葉昌樹、保健室における悩み相談 (連載:第3回) 保健ニュース、査読無、6月8日号、2008、4-5

秋葉昌樹、フォーラム・シアターのすすめ (連載:第4回) 保健ニュース、査読無、7月8日号、2008、4-5

秋葉昌樹、エスノメソドロロジー研究のパフォーマンス、社会と調査、査読無、3、2009、45-51

秋葉昌樹、ポグゲ・ルイーゼ点子、新連載「ほけきょん なう～はるさき村から～」第1幕:はるさき村で“ほけきょん”誕生記、健康教室、査読無、713、2010、36-39

秋葉昌樹、サリー、連載「ほけきょん なう～はるさき村から～」第4幕:保健室で“ほ

けきょん”する、健康教室、査読無、716、2010、34-37

ポグゲ・ルイーゼ点子、秋葉昌樹、連載「ほけきょん なう～はるさき村から～」第9幕:「巡業先」決定!そして配役・練習へ、健康教室、査読無、721、2010、40-43

秋葉昌樹、森陽平、連載「ほけきょん なう～はるさき村から～」第10幕:Fun in Games!、健康教室、査読無、722、2010、50-53

〔図書〕(計2件)

北澤毅、他、世界思想社、質的調査法を学ぶ人のために、2008、280(45-48、108-129)

好井裕明、他、世界思想社、エスノメソドロロジーを学ぶ人のために、2010、324(116-132)

〔その他〕

ホームページ:研究代表者が開設し運営する研究用ホームページ「保健室の今日的課題研究会(ほけきょん 2.0)」(<http://sites.google.com/site/akibayo/hoke-kyon>)を適宜活用し、研究方法、参加方法等の告知および成果の普及・活性化に努めた。

同ホームページでは、そのトップページに「保健室における今日的課題をふまえ、子どもへの対応を考える“新しいタイプの”ワークショップ研究会「ほけきょん 2.0」子どもたちとどんな風に関わりをもっているか/いこうかとか、新たな目標や課題に対応するにはどんな関わり方ができるだろうかとか、参加者どうして試してみたり、模索してみたりする場、講習会や研修会とはちょっと違った平たい場をつくりたいと考えています。」という研究参加を呼びかける文章を掲げ、同時に研究代表者の連絡先等を掲載した。

地区学校保健研修会講師:「講演&ワークショップ:子どもの心に触れたい...~日常会話を分析し、演ずることで見えてくること~」(2008年12月10日、X生涯学習センター:パレットおおさき)と題しての依頼講演会を実施したが、所謂講演会のスタイルではなく、パフォーマンス・エスノグラフィ的支援研究のデモンストレーションとしての時間を採ってもらいつつ、実際に参加者である実践家に即興的なパフォーマンスをしてもらいつつ、日常的なヘルスプロモーション活動にまつわる諸問題をあぶり出しつつ共有した。

秋葉昌樹、保健室のまえと後ろ、教育労働ネットワーク、査読無、53、2009、21

秋葉昌樹、“泣き”の舞台装置、教育労働ネットワーク、査読無、54、2009、21

秋葉昌樹、催眠術の真実(?)、教育労働ネットワーク、査読無、55、2009、18-19

秋葉昌樹、保健室を彩る色々、教育労働ネットワーク、査読無、57、2010、20-21

秋葉昌樹、人生の練習問題 - - 2010年夏、教育労働ネットワーク、査読無、59、2010、22-23

上記 ~ は、 の機会の後に継続したの参加者らとの交流の中で、参加者らが発行する同人誌的教育ジャーナルである「教育労働ネットワーク」誌に不定期連載をしたものである。それぞれのタイトルに示されているとおり、養護教諭を中心とする実践家の日常的活動にとって身近なトピックと思われる素材をもとに執筆し、研究交流を継続中であり、そうしたトピックを発展させることで、雑誌論文の項目に記した ~ の報告の基となる実践の転輸手的役割ももたせるなど、研究を展開するうえで由紀的に関連づけされた。

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

秋葉 昌樹 (AKIBA YOSHIKI)

龍谷大学・文学部・准教授

研究者番号：30330020